

英学史から見た幕末期における 異言語の衝撃と日本の対応

The Impacts of the English Language and the Japanese Responses in the Closing Days of the Edo Period from the Perspective of English Language Studies

鳥飼 慎一郎
TORIKAI Shinichiro



幕末英学史、漂流民、長崎オランダ語通詞、森山栄之助、中浜万次郎

the history of English language studies in the closing days the Edo period, the ship-wrecked, Japanese-Dutch interpreters in Nagasaki, MORIYAMA Einosuke, John Manjiro

Abstract

Japan was repeatedly exposed to impacts from the West which resulted in opening the country to the world at the end of the Edo period. This paper explores how Japan responded to them linguistically within the framework of the book *The Far East: A History of Western Impacts and Eastern Responses, 1830-1975* by Clyde and Beers (1975). First, the history of impacts from Russia, England, and America is briefly reviewed. Second, three groups of Japanese people who played important roles in modernizing Japan are introduced: (1) the scholars of Western sciences and interpreters who studied Dutch, (2) the ship-wrecked sailors who were luckily rescued by American ships and had a chance to learn the English language and western technology, and (3) the scholars and feudal lords who interviewed the ship-wreck returnees and publicized their collected stories or adopted the advanced western industrial technology. Third, the history of English language studies from 1808 and on is explored, reviewing the two important English-Japanese dictionaries and one English textbook which were published in 1811, in 1814, and in 1859 respectively. In relation to those books two key persons are studied: MORIYAMA Einosuke, an excellent Dutch interpreter and enthusiastic student of English of Ranald Macdonald, and John Manjiro, a ship-wreck returnee who taught Japan the western method of navigation and colloquial American English.

1. はじめに

江戸時代は一般に鎖国の時代と考えられ、海外との交流はオランダと清国と朝鮮を除いてはなかったと思われがちである。この「鎖国」という外交通商政策は、主としてキリスト教の禁止と海外との貿易の徳川幕府による独占という観点から実行されたものであり、鎖国に至る歴史的過程は概ね以下の年表に示す事柄をもって語られることが多い。

年表 1

- 1612年 キリスト教禁止令
- 1633年 朱印船以外の海外渡航禁止、在外在住5年以上の日本人の帰国禁止
- 1635年 すべての日本人の海外渡航及び帰国の禁止
- 1639年 ポルトガル船の来航禁止
- 1641年 平戸のオランダ商館を長崎の出島に移す

しかしながら、当時の世界情勢は日本一国の鎖国政策を許容するような状況とはほど遠い状況であった。1700年代中期にイギリスで起こった産業革命は大量の工業製品の生産を可能としたが、その製品の輸出も不可避であった。1800年代に入ると近代ヨーロッパ諸国は自国の工業製品の市場開拓のために東アジアでの植民地争奪戦を本格化させることになる。この時期は日本近海での捕鯨漁が隆盛を極めた時期でもあり、それにロシアの南下政策が重なり、江戸期の日本はこれらの近代欧米諸国からの開国と通商の要求に否応なしに対応させられることになる。日本国内においても、商品経済が盛んになり、各地で付加価値の高い商品が生産されるようになり、それらの商品は船舶を使って大坂や江戸に大量に輸送され、売買されるようになる。当時の日本の船舶はその構造上の欠陥から海難事故が多発し、多くの日本人が遭難死するが、そのうちの少数の者は運よく海外の船舶に救助され、無事帰国を果たすものも現れ、民間レベルでも近代欧米諸国との接触が始まることになる。このように海外からの開国、通商の圧力、国内の船舶による流通の拡大が、鎖国政策を非現実的なものとし、日本は西洋の衝撃をまともに受ける時代へと入っていくのである。

2. 本論の目的

日本人が江戸期を通じてどのように近代西洋諸国と対峙し、困難な時代を乗り越えていったのかを、幕末の英学史を例にとりて考察し、日本人の異言語・異文明に対する対応の仕方を考えてみる。

本論を書くに当たっては、この江戸時代の欧米諸国の東アジア進出とそれに対する対応を迫られた日本との関係を、Clyde & Beers (1975) *The Far East: A History of Western Impacts and Eastern*

Responses の視点から捉えてみることにした。この本に付いている日本語の題名は『東亜：西洋の衝撃と東洋の対応史』である。江戸期、とりわけ江戸末期は、西洋からの衝撃を日本が直接受けた時代であり、本書はその衝撃に対して日本がどのように対応したのかを考える視点を提供してくれると考えたからである。

本論では、まず江戸期における東アジアの国際情勢を概観する。そのうえで、幕末における英学史の始まりといわれているフェートン号事件とその後の対応について言及し、次に西欧からの衝撃に対応した人物として森山栄之助と中浜万次郎の2名を例に取り上げて日本人が異文化・異言語にどう対応してきたのかを考えてゆくことにする。

3. 江戸期における東アジアの国際情勢

江戸期における東アジアの国際情勢を考える上で要となる国は、ロシア、イギリス、アメリカの3か国である。

3. 1. 対ロシアとの関係

ロシアはモスクワ大公国から発展した国でヨーロッパの辺境に位置する国であった。ウラル山脈以東に広がる広大なシベリア地域には黒貂やラッコの毛皮あるいは海産物の交易を求めて、コサックがヤクーツク、オホーツク、イルクーツクに砦や街を築いていた。1682年にピョートル大帝が即位すると、ロシアは急速に近代化を図り、シベリア及び東アジアに積極的に進出するようになる。このロシアの歴史に初めて登場する日本人は「伝兵衛」という漂流民である。1697年にロシアのコサックの探検隊長アトラソフが、カムチャッカ半島西岸のイーチャ川で先住民族の捕虜となっている伝兵衛を保護したことが記録に残されている。伝兵衛はピョートル大帝に拝謁し、ペテルスブルグで日本人初の日本語の教師、日本人初のロシア正教徒になっている。ロシアは将来の日本との交易に備え、日本人漂流民を保護し、衣食住を保証し、日本語の教師として伝兵衛の他にも以後多くの日本人を取り立てている。1782年には伊勢の白子の黒屋光太夫たちが遭難し、遠くアリューシャン列島のアムチトカ島まで流され、ロシア人に保護されている。黒太夫はエカテリーナ2世に拝謁し帰国を要望し、許可されて、1792年にラクスマンとともに根室に帰国しているが、黒太夫と共に遭難した新蔵はロシアに日本語の教師として残っている。1793年には仙台藩石巻の若宮丸が遭難し、アリューシャン列島に漂着し、ロシア人に保護され、1804年にレザノフに伴われて長崎に帰国している。その時も善六以下6名はロシアに残っている。1813年にはゴローニン事件が起き、蝦夷地開発に尽力した高田屋嘉兵衛とロシア船ディアナ号艦長のゴローニンとが捕虜交換という形で収拾されている。江戸期のロシアとの関係は年表2に簡単にまとめておいたが、江戸期における日本とロシアとは頻りに接触を繰り返し、両国間の国境紛争あるいはロシアからの通商要求に日本は晒されることになる。

年表 2

- 1632年 コサックがヤクーツクに砦を建設
- 1643年 コサックが毛皮水産物の取引のためにオホーツクに町を建設
- 1652年 コサックが黒貂の狩猟を目的にイルクーツクに住み始める
- 1682年 ピョートル1世（ピョートル大帝）が即位する
- 1695年 日本人漂流者伝兵衛がカムチャッカでロシア人と遭遇
- 1739年 ロシア船が安房沖に出没
- 1778年 ロシア船が蝦夷地にて通商を要求、松前藩が拒否
- 1782年 大黒屋光太夫らが遭難、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着
- 1792年 大黒屋光太夫らがアダム・ラクスマンとともに根室に帰国
- 1793年 若宮丸が遭難
- 1797年 ロシア人が択捉島に上陸
- 1804年 ロシア使節レザノフが若宮丸の漂流民を伴い長崎にて通商を要求、幕府は拒否
- 1806年 ロシア船が樺太や択捉島を攻撃、翌年も来襲
- 1811年 ロシア艦長ゴローニンを国後で捕える。
- 1812年 高田屋嘉兵衛がロシアに捕われる
- 1813年 高田屋嘉兵及びゴローニンを釈放
- 1853年 プチャーチンが長崎に来航、通商を求める
- 1854年 日露和親条約締結
- 1858年 日露修好通商条約締結
- 1861年 対馬占拠事件

3. 2. 対イギリスとの関係

イギリスは、1700年代を通じて着実に工業化を進め、いち早く動力を使って工場で製品を生産するシステムを作り上げた。その結果 1800年代中期から 1900年代初頭にかけて世界の工場と言われる程の大量の工業製品を生産し、圧倒的な海軍力を背景に世界各地に植民地を持ち、覇権を確立するに至った。このイギリスの支配は 1700年代においてインド、1800年代には東南アジア、そして東アジアに及ぶことになる。1757年にプラッシーの戦いでインドの太守に対し勝利し、1824年にはシンガポールを植民地とし、1840年には清国に対してアヘン戦争を起こし、1842年には香港を割譲させることに成功している。これを機会にイギリスは対中国貿易を拡大するとともに、日本近海で盛んに捕鯨漁を行うようになる。日本が幕末期にイギリスと直接接するのとは後述する 1808年のフェートン号事件であるが、それ以降もたびたび日本にイギリス船が来航し通商を求めている。江戸期におけるイギリスのアジア及び日本に対する活動を年表3にまとめておく。

年表 3

- 1600年 リーフデ号が豊後の臼杵（うすき）に漂着、ウィリアム・アダムスが徳川家康の外交顧問に就任
- 1623年 平戸の商館を閉じる
- 1757年 プラッシーの戦いでイギリスがインドの太守軍を破る
- 1765年 イギリス東インド会社がインド・ベンガル地方の徴税権を得る
- 1796年 イギリス船が室蘭に来航
- 1808年 フェートン号事件
- 1817年 イギリス船が浦賀に来航
- 1818年 イギリス船が浦賀に来航
- 1822年 イギリスの捕鯨船サラセン号が補給のため浦賀に来航
- 1824年 シンガポールを植民地化
- 1824年 イギリスの捕鯨船が日立に上陸（マクドナルドの供述によれば、当時の外国捕鯨船700艘中400艘はイギリス船）
- 1824年 イギリスの捕鯨船が薩摩に上陸
- 1827年 イギリスが小笠原諸島の領有を宣言
- 1840年 アヘン戦争
- 1842年 香港割譲
- 1845年 イギリス軍艦サマラン号が琉球、長崎に測量目的で来航
- 1846年 イギリス船が琉球に来航
- 1854年 日英和親条約締結
- 1858年 日英修好通商条約締結
- 1861年 トーマス・グラバーが長崎にグラバー商会を設立

3. 3. 対アメリカとの関係

アメリカは当時は新興国家であり、ロシアやイギリスと比べ遅れて東アジアに進出してきた。アメリカが東アジアに進出する大きなきっかけとなったのが、日本近海での抹香鯨の発見である。その当時、抹香鯨の脳油は石蝋、ロウソク、灯油、機械の潤滑油に使われ極めて貴重であったため、各国は大西洋の抹香鯨を乱獲し、その数は激減していた。1820年に西太平洋沿岸に抹香鯨の大群が生息していることがわかると、各国の注目はにわかに日本近海に注がれることになる。アメリカは西太平洋でのクジラ漁の補給基地として日本の開港を強く望むようになる。1848年にカルフォルニアで金鉱が発見された。その年にアメリカはメキシコとの戦争に勝利し、カルフォルニアをメキシコから割譲させ、自国の領土が太平洋岸まで達し、西海岸への人の移動も盛んになった。江戸末期はアメリカの捕鯨船あるいは中国との交易の商船の中継補給基地としての日本の

価値がにわかには高まった時期でもあった。すでに1803年にはアメリカ船が長崎に来航し、通商を求めている。1837年にはアメリカの商船モリソン号が日本人漂流民を連れて浦賀、薩摩に来航し通商を求めるも、異国船打ち払い令に依り日本側から砲撃を受けている。1846年には東インド艦隊司令長官が浦賀に来航し、通商を求めるも幕府に拒否されている。1853年には東インド艦隊司令長官のペリーが来航し、武力を背景に日本を無理やり開港させている。その結果、日本は1854年に日米和親条約、1858年に日米修好通商条約を結び、イギリス、フランス、オランダ、ロシアとも同様の条約を結んでいる。

年表 4

- 1803年 長崎に来航、通商を求める
- 1820年 アメリカの貨物船が日本近海で抹香鯨の大群を発見
- 1837年 モリソン号が浦賀、薩摩に来航、通商を求める（モリソン号事件）
- 1844年 望夏条約を中国と結ぶ（南京条約とほぼ同じ内容）
- 1846年 東インド艦隊司令長官ビッドルが浦賀に来航、通商を求める
- 1848年 カリフォルニアで金鉱が発見される、同年カリフォルニアがアメリカに併合される
- 1848年 ラナルド・マクドナルドが焼尻島に上陸
- 1849年 プエブル号が漂流民引取りのため長崎に来航
- 1853年 東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航、通商を求める
- 1854年 日米和親条約締結
- 1856年 ハリスが下田に着任
- 1858年 日米修好通商条約締結

3. 4. 幕末において活躍した日本人像

このような激動の時代において多くの日本人が歴史の舞台に登場するが、その行動を本論の視点である「西洋からの衝撃と東洋の対応」から改めて捉え直してみると、大きく3つのグループに分けることができる。第1のグループは当時のインテリ層であり、その多くは蘭学者であった。江戸期に鎖国政策が敷かれると、西洋文明に関する情報はオランダ語を通して日本にもたらされることになる。そのため、当時のインテリ層の多くはオランダ語に通じ、その多くはオランダ通詞であったり、蘭方医であったりした。森山栄之助や堀辰之助は、外交通商交渉の最前線に立ち、西洋諸国と日本との国益が対立する中で、通詞あるいは外交官として西洋からの衝撃と対峙することになる。高野長英は著名な蘭方医であるが、西洋の進んだ文明を強く認識し、日本人漂流民の送還と通商のために来航したモリソン号に対する幕府の外交政策を批判するという行動をとっている。箕作阮甫、福沢諭吉、西周、中村正直などは西洋文明に対する深い造詣から日本の近代化に教育の面から貢献した人々である。彼らもまた西洋文明を受け入れて日本を近代化すべきで

あるという立場をとり、その対応を具現化した者たちである。箕作麟祥と榎本武揚と大鳥圭介は最終的には明治政府の官僚となり日本の西洋化に呼応した者たちであるが、榎本と大鳥は幕臣として函館戦争で明治政府に反旗を翻したのちに投降し、官僚となっている点で麟祥とは対照的な行動で西洋の衝撃に対応しているのである。下記のグループ1に挙げた最後の二人は密航を試みた人々である。吉田松陰は下田でペリーに密航の協力を依頼するが断られている。新島襄は函館から密航に成功し、アメリカでキリスト教教育を受け帰国し、同志社英学校（後の、同志社大学）を作っている。両名とも自らがアメリカに渡航するという行動で西洋文明にじかに触れ、理解しようとした者たちである。この当時のインテリ層は程度の差こそあれ誰もが西洋諸国の高い工業力、軍事力、政治制度に対して衝撃を受け、それを日本に対する脅威と感じ、それなりの立場と思想を持ってその脅威に対応しているのである。

グループ1

- 森山栄之助（長崎のオランダ語通詞、英語通詞、幕府の外交官）
- 堀辰之助（長崎のオランダ通詞、日本初の本格的英和辞典『英和对訳袖珍辞書』編集）
- 高野長英（仙台藩士、蘭学者、医師、兵法学者、蛮社の獄で弾圧される）
- 箕作阮甫（津山の人、蘭学者、洋学者、医学者、兵学者、蕃書調所主席教授）
- 福沢諭吉（中津藩士、蘭学者、英学者、啓蒙思想家、慶応大学の創始者）
- 西周（津和野藩医師、オランダに留学、哲学者、法学者、啓蒙思想家）
- 中村正直（幕臣、イギリスに留学、啓蒙思想家、スマイルズの『Self Help』を翻訳する）
- 箕作麟祥（阮甫の孫、明治の英学者、法学者、教育者、司法官僚）
- 榎本武揚（幕臣、オランダに留学、函館戦争を指揮、逓信大臣、農商務大臣）
- 大鳥圭介（赤穂の人、蘭学者、英学者、函館戦争を指揮、技術官僚、外交官）
- 吉田松陰（萩の人、教育者、思想家、ペリーに密航を依頼、拒否される）
- 新島襄（安中藩士、函館からベルリン号で密航、宗教家、同志社大学を創設）

第2のグループは一般の漂流民たちである。彼らは遭難し、幸運にも救助されて九死に一生を得るが、自己の生存のために好むと好まざるとにかかわらず西洋文明の中に直接身を置くことになる。中浜万次郎と浜田彦蔵はアメリカで教育も受けている。彼らの中には、様々な事情から帰国を果たせない者もいるが、帰国を果たした者たちは自らの体験を日本のインテリ層に語り、彼らの貴重な情報源になっている。大黒屋光太夫と高田屋嘉兵衛は船頭であり、当時のインテリ層に属しているといつてよい。この二人は漂流あるいは拉致という形で直接ロシアと接触をし、ロシアからの衝撃を身をもって体験した人々である。彼らは外交の最前線に立ち、自らの教養を駆使してロシアとの外交関係の発展に尽くすという形で対応することになる。中浜などは航海操船術だけでなく、広くアメリカの民主制度についてまでも詳しく報告している。帰国を果たした漂流民に対する日本側の対応もその時代を反映して大変興味深い。江戸幕府は、鎖国政策の建前上

漂流民に対して自らが体験したことを他に語ることを表向きは厳しく禁止しているが、彼らの語ったことは時を経ずして広く世間に知れ渡るようになる。それだけ当時の日本人は海外の情報を渴望していた証左でもある。中浜万次郎については後述する。

グループ2

大黒屋光太夫（伊勢白子の船頭、1782年江戸に向かう途中遭難、7か月余り漂流ののちアリューシャン列島のアムトチカ島に漂着、ロシア人とともに4年後に島を脱出し、カムチャッカ、オホーツク、ヤクーツクを経てイルクーツクに着く、1791年エカテリーナ帝に帰国を懇願し、1792年ラクスマンに伴われて磯吉と共に根室に帰国）

新蔵（大黒屋光太夫とともに遭難、ロシアに帰化し、日本語通訳となる）

津田夫（仙台の人、1793年若宮丸で江戸に向かう途中遭難、6ヶ月漂流しアリューシャン列島に漂着、レザノフとともに地球を一周して12年ぶりに長崎に同僚の佐平、儀平、太一郎と帰国。）

善六（若宮丸の乗組員、ロシアに帰化、日本語教師として現地に残り、レザノフの通訳となり、ゴローニン引渡しの際の通訳として函館に行く）

重吉（尾張の人、1813年御前崎沖で遭難、484日間太平洋を漂流、カルフォルニア沖で英国商船フォレスター号に救助され、ロシアを経て1816年に帰国、日本初のロシア語辞典『ワロシヤノ言』を編集）

高田屋嘉兵衛（淡路島の人、北前船の船頭、蝦夷地の開発と経済発展に尽くす、1812年にゴローニン事件に巻き込まれロシア側に拉致されるが、1813年に解放され帰国）

音吉（尾張の人、1832年江戸に向かう途中嵐にあい14か月漂流し、アメリカ西海岸に漂着、インディアンに救助されるが、後にイギリス人に売り飛ばされる。ロンドンに上陸した最初の日本人、マカオで日本初の聖書の日本語訳を完成、1837年モリソン号で日本に向かうが打ち払われる。1837年アメリカに渡り、1854年イギリスの極東艦隊司令長官スターリングの通訳として長崎に来航、1867年シンガポールで没）

次郎吉（越中の人、1838年仙台沖で遭難、アメリカの捕鯨船に救助され、ハワイ、ロシアを経て1843年に択捉に帰還、1847年に加賀にもどる）

初太郎、善助（摂津の人、1841年犬吠崎沖で遭難、スペイン船に救助され、カルフォルニア、マカオを経て、1843年長崎に帰還）

仙太郎（安芸の人、1850年江戸に向かう途中嵐にあい遭難、2ヶ月漂流し、アメリカ船に救助され、サンフランシスコに滞在する。ペリーの日本遠征に通訳として同行）

浜田彦蔵（播磨の人、1851年江戸に向かう途中、紀伊半島沖で遭難、同僚の亀蔵、次作と共に2か月漂流ののち南鳥島に漂着、米国商船オークランド号に救助される。ボルチモアのミッションスクールで学校教育を受ける。クリスチャンに改宗し、アメリカに帰化、1859年ハリスの通訳として帰国、3人のアメリカ大統領、ピアース、ブキャナン、リンカーン

に会う。日本で初めて英字新聞を発行した)
中浜万次郎

第3のグループは、漂流民たちから西洋の話を聞くという形で西洋の状況を理解しようとしたインテリ層である。彼らは漂流民から聞いたことを基にして西洋に関する優れた書物を著している。このように海外の事情を直接見聞きした者に審問するというやり方の原型は、新井白石にすでにみられる。白石が審問した相手は日本に宣教のために密入国した宣教師であるが、宣教師のいる牢まで自分が赴き、直接話を聞くという姿勢は西洋に対する強い関心を感じさせる行為である。白石は審問して知りえたことを基に西洋の地理、人文等をまとめ、『西洋紀聞』、『采覧異言』を著している。桂川甫周は幕府の奥医師であり、『ターヘルアナトミア』の翻訳にもかかわっている当時最高の蘭学者であるが、大黒屋光太夫が将軍徳川家斉に拝謁しロシアの様子を語るのを記録して『漂流民御覧之記』、『北槎聞畧』を著している。将軍が漂流民に謁見を許し、話を聞くというのも日本人の当時のインテリ層の西洋に対する高い関心を示す事例である。大槻玄沢は杉田玄白、前野良沢の弟子であり、著名な蘭学者、蘭方医である。仙台藩からの依頼を受けて津田夫たちの話をまとめて『環海異聞』を著し、それを補足する形で『北辺探事』、『異国漂流記』を著している。池田寛親は三河新城菅沼家の御用人で国学者であるが、重吉を審問して『船長日記』を著している。古賀謹一郎は江戸末期から明治初期にかけて活躍した儒学者で、洋学者である。儒学者であるにもかかわらず西洋に対して強い興味を持ち、帰国後小石川の大黒屋長衛門宅に幽閉されている次郎吉を審問して『蛮談』を著すとともに、蕃書調所の初代校長を務め、堀達之助に日本最初の本格的な英和辞典『英和对訳袖珍辞書』を編集させている。遠藤高環は加賀藩士で暦算家である。彼は金沢藩主前田斉泰の命で『時規物語』を編集している。河田小龍は土佐高知の画家である。帰国した中浜万次郎の話を基に『漂異紀畧』を著し、藩主に上梓している。藩主の中にも西洋文明に強い関心を示し、漂流民の話を進んで聞く者が前述の徳川家斉、前田斉泰以外にも多くいた。その代表は鍋島直正と島津斉彬であろう。直正は積極的に藩の近代化を推し進め、精錬所を作り反射炉で鉄鋼の生産を行いアームストロング砲などを製造し、蒸気機関、蒸気船などの建設も手掛けた。斉彬は鹿児島郊外に近代工場である集成館を建設し反射炉やガラス工場で造船、造砲、ガラス製造、紡績、写真、電信などの事業を行った。彼らは西洋の高い技術力を取り入れることで西洋からの衝撃に対応したのである。江戸幕府も海外から帰国した漂流民に高い関心を持ち、中浜万次郎から聴取したことを『糺問書』、『漂客談奇』としてまとめている。

グループ3

新井白石（1715年、イタリア人宣教師シドッチへの審問を基に『西洋紀聞』を、1725年に『采覧異言』を著す）

桂川甫周（大黒屋光太夫が将軍家斉に語ったことを基に『漂流民御覧之記』を、1794年には『北槎聞畧』を著す）

大槻玄沢（1807年、津田夫からの話を基に『環海異聞』、『北辺探事』、『異国漂流記』を著す）

池田寛親（1822年、尾張の船頭重吉の話を基に『船長日記』を著す）

古賀謹一郎（1847年ごろ越中の船乗り次郎吉の話を基に『蛮談』を著す）

遠藤高璟（1850年、金沢藩の藩主の命で次郎吉の話を基に『時規物語』を編集している）

河田小龍（1852年、万次郎からの話を基に『漂異紀畧』を著す）

鍋島直正（フェートン事件を契機に、近代工業をおこし、反射炉、アームストロング砲などを製造する）

島津斉彬（1851年、万次郎を聴取、集成館事業を開始、日本初の国産西洋帆船、同蒸気船を建造、薩摩切子の制作をする）

4. フェートン号事件

幕末史は1853年のペリーの来航に始まると一般的には言われているが、幕末の英学史はそれよりも45年も前に長崎で起こったフェートン号事件にまでさかのぼる。

4. 1. フェートン号事件の背景

フェートン号とはイギリスの軍艦の名称である。フェートン号事件が起こった1808年当時のヨーロッパは、フランス革命後に政権に就いたナポレオンによって開始されたナポレオン戦争の真っただ中であつた。ナポレオンはイギリス、オランダ、オーストリアに宣戦を布告し、1795年にオランダを占領、弟のルイ・ボナパルトを皇帝とする衛星国のホラント共和国を設立した。オランダのウイレム5世はイギリスに亡命し、オランダの海外植民地をイギリスの管理下に置くことを条件にイギリスと同盟を結んだ。しかしながら、その同盟に従わなかったオランダ領東インドのオーファーストラテン総督に対してイギリスの東インド艦隊が攻撃をしかけた。1808年にオランダ船を追ってイギリス船フェートン号がオランダ船と偽って長崎に襲来、「旗合わせ」のために接近したオランダ商会員のホゼマンとスヒンメルを拉致し、食料と水を要求した。イギリスの軍艦の武力の前に幕府はなすすべがなかった。この事件の責任をとって長崎奉行松平図書頭康英が切腹、鍋島藩主松平肥前守は幕府から百日の逼塞を言い渡されている。

4. 2. フェートン号事件の意味

フェートン号事件は日本にとって大きな衝撃であつたと同時に日本の抱える様々な問題点を浮き彫りにしている。第1の問題点は国防である。フェートン号の兵装は大砲38門、カロネード砲10門であつたにもかかわらず、当時の幕府および長崎警護の諸藩は軍事的に到底太刀打ちできるものではなかつた。その当時できることと言えば、藁や葦を積んだ多数の手漕ぎの小舟で周囲を取り囲み、それらの小舟に火をつけてフェートン号を焼打ちにするという程度のものであつ

た。第2の問題点は国防意識の低さである。その年長崎の防備についているべき鍋島藩は、本来オランダ船が来る時期ではないという理由から藩兵の大半を引き上げてしまっていた。そのため、幕府は鍋島藩、筑前藩、大村藩などに急きょ出兵を要請する始末であった。第3の問題点は英語によるコミュニケーションの問題である。当時はオランダ語が日本の外交用語であり、英語がわかる通詞がいなかったのである。そのため、フェートン号の艦長のペリユーとの交渉も、フェートン号に乗り合わせていたオランダ生まれの水兵のメッツレルを介して行わねばならなかった。

4. 3. フェートン号事件への対応

フェートン号事件が起こった1808年に幕府は早々に長崎港の周辺に砲台を構築し防備を固めている。同じく同年、幕府は時の長崎奉行曲淵和泉守に英語の通詞の養成を指示し、翌1809年には本木庄左衛門以下14名のオランダ通詞がオランダ商館次席のボロムホフから英語の学習を開始している。1810年には吉雄権之助が『諳厄利亜語和解』の第1冊を完成、1811年には猪股伝次右衛門が『諳厄利亜語和解』の第2冊を完成、岩瀬弥十郎が『諳厄利亜語和解』の第3冊を完成させ、長崎奉行所に献上している。同年1811年には本木庄左衛門らが『諳厄利亜語小笈』10冊を完成させている。1814年には本木庄左衛門らが日本初の英和辞典『諳厄利亜語林大成』4冊（15巻）を完成させるに至っている。これら諸本の完成の早さは大変なものであり、当時この作業に携わった通詞たちの並々ならぬ意気込みと危機感が伝わってくる。

5. フェートン号事件に衝撃を受けて編集された辞書類

5. 1. 『諳厄利亜語和解』

最初に完成した『諳厄利亜語和解』は焼失して現存しないが、勝俣銓吉郎が控えを取ってあることが井田好治（1982：13）に記されている。それを孫引きすると『諳厄利亜語和解』の構成は以下のとおりである。第1巻と第2巻は以下の事柄をテーマとした会話集であり、第3巻は単語集である。会話集の中身を一部以下に抜粋しておく。

- 第1巻 天気・逍遙・時刻・通語・思慮・言辞・作為
- 第2巻 面晤・知識・来往・礼讓・誓約・問齡
- 第3巻 単語集（419語を集録）

How is the weather?

ハウ イス デ ウエードル

What weather is it?

ウアット ウエードル イズ イット

It is very good weather.

ウエリ グード

It is fine weather.

ファイン

It does'nt [原文のまま] blow at all.

ドラスンド ブロウ アット ヲール

It is quite calm.

クウエイト カーム

The sun shines.

デ シュン セインス

片仮名による発音表記の中で、オランダ語の影響を受けた部分も散見できる。オランダ語では [θ] と [ð] の音がない。英語の [θ] は t 音に、[ð] は d 音になることが多いが、上記の例の weather の th 音が「ウエードル」と d 音になっているのもその影響であろう。定冠詞の the が「デ」と表記されているのも同じ理由からである。後述する中浜の著した『英米対話捷徑』だけは、子音の前の the に「デ」ではなく、「スイ/ズイ/ツイ」の3種類の発音表記を用いている。Weather も「ワザ」とオランダ語の影響とは無関係の発音表記である。オランダ語の母音 [u] は [ʏ] で発音されるため、「ユ」のように聞こえる。Sun が「シュン」と表記されているのもそのためである。Very が「ウエリ」と表記されているが、very の v 音を「ウ」で表記するのは、後述する『諳厄利亜興学小笈』、『諳厄利亜語林大成』、『英米対話捷徑』でも同様である。V 音の発音の表記はいずれの書も有声摩擦音の [v] を、無声摩擦音の h 音を含む片仮名で表記している点が共通している。以上の点を表1にまとめて、表示しておく。

表1

	和解	小笈	大成	捷徑
weather	ウエードル	ウエッドル	ウエッドル	ワザ
the	デ	デ	デ	スイ/ズイ/ツイ
v 音	ウヒ	ウヒ	フヘー	フヘー
very	ウエリ	ウエリ	ウエリ	ウエリ/ウエレ

5. 2. 『諳厄利亜興学小笈』

1811年に本木庄左衛門らが編集したもので、長崎のオランダ通詞本木栄之進（本木庄左衛門の父）が1760年ごろに海外からもたらされたオランダ語と英語の会話書を書き写したものを底本としている。それにオランダ商館副館長のプロムホフから学んだ英語を加えて語彙集及び会話

集の形に編集したもので、日本初の英語語彙・会話集である。() 内は筆者による解説である。

語彙部門：2,339 語

乾坤（天文、地理、鉱物、家屋、日時）

時候（季節、日時）

数量（基数、序数、倍数）

官位人倫人事（官位、軍隊組織、人の名称、職種、学問名、親族名）

支体（人体部位、病名）

気形（動物名）

器財（財貨、物品名、工具、武具、船舶部位名）

服食（衣服、生地素材、食事名、食品名）

生植（植物名）

言辞（形容状、位置、知的語彙、道徳語彙、心理的語彙、認知語彙）

日常会話のフレーズ 572 例、学術会話 1,431 例からなっている。

本木庄左衛門（正栄）は『諳厄利亜興学小筈』を編集するにあたっての苦勞を以下のように「凡例」の中で吐露している。以下の抜粋は井田好治（1982a, pp.18-19）に依る。

其書を披閱するに、字形は和蘭に大同小異なりといえども、更に東西を弁せずして、誠に暗夜を独行するが如く、一句片言分明ならず。

『蘭学事始』を彷彿させるような部分である。オランダ語と英語は語形は似ている語もあるが「一句片言」理解できず、闇夜を独りで行くようであるとたとえている。

素より音釈の曉得し難きこと、面命口授を受くるとも容易に其正を得ざれば、片仮名の字を合わせて記すとも、彼の語音に協叶し難し。只附字合字を似て、呼法の便りするものなり。成語言談文辞に至りては、前後文章の応接に随い其意転ずるがゆへ、和語漢語を以て的当し難きもの専ら原辞の本意を孝索して訳文を加ふ。

この部分は『諳厄利亜興学小筈』の発音表記と語義の解説に相当する部分の記述である。当時のオランダ語通詞たちがいかに苦勞してオランダ語の発音を学んだのかが想像できる部分でもある。「発音の習得は直接面と向かって教えてもらってもなかなかうまく発音できるようになるものではない、カタカナ書きは単に便法である」とカタカナ書きによる発音表記の不備を予め断っている。後半部分は、「イディオム、会話、文中の単語の意味はコンテキストによって決まるので、和語や

漢語一語を以てあらわすのは難しいため、語義については語源的な意味を付け添えた」というのである。いかにも日々日本語とオランダ語の橋渡しをしている通詞ならではの外国語の意味に対する鋭い感覚と対処法である。

本木が「凡例」で述べているように、『諸厄利亜興学小筈』の片仮名による発音表記は不完全なものが多いのであるが、これは片仮名表記だけに起因するものではない。教師役を務めたオランダ商館員のブロムホフは軍人としてアイルランドで軍務に服したことがあり英語が話せたが、英語母語話者ではなかったため、彼の英語の発音は不完全でオランダ語の影響を多分に受けたものであった。彼から英語を学習する日本人オランダ語通詞もオランダ語の発音に慣れており、オランダ語の影響を受けやすかったことが考えられる。以下にオランダ語の発音の影響を受けていると思われる事例を分類し、該当する例をいくつか挙げておく。「 」内に示された日本語は『諸厄利亜興学小筈』に示された訳語である。

(1) オランダ語では短母音の u は [ʏ] (ユ) と発音される。

bull ビュル、butcher ビュッチョル、cup キュップ、cut クット、dust デュスト、
fur ヒュル、lungs リュングス、sun シュン

(2) オランダ語では語尾の d は無声化され、[t] と発音される。

bed ベット、created 「開闢」ケレテット、England 「諸厄利亜」エンキレント、
friend フレント、hand ヘント、hard ハルト、head ヘート、red レット、wind ウイント、
wood ウート、

(3) オランダ語では n の前の k が発音される。

knees キニース

(4) オランダ語では v を [f] と発音する。

cave ケーフ、devil デフル、fever ヘーフル、grave グレーフ、silver シルフル、
traveller テレフレル、veal ヘール、veil ヘール、vinegar ヒネゲル

(5) オランダ語では j を [y] と発音する

January ヤニューエリ

(6) オランダ語には英語の黙字に相当するものがないので英語の黙字の b を発音する。

debt デフト、limb リムブ、thumb テムブ、wamb [原文のまま] ウエンブ

(7) r 音の強調

army アルミ、the first デ ヒルスト、garden ゲルデン、her ヘル、water ウアトル

(8) 語尾の k 音

cheek チッキ、drink ディリンキ、flake フレッキ、milk ミルキ、snake スネーキ、
stick シティッキ

日本語に入った外来語の音訳は入った時代によって変わってくる。その代表的な例が下記の語の語末の k の発音である。『日本国語大辞典』（第2版）によればいずれの語の場合も前者のほうが後者よりも早く 1800 年代から 1900 年代初頭に日本語に入ってきている。『諳厄利亜興学小笈』の上記の k 音は、キと音訳した初期の例である。

strike : ストライキ < ストライク

stick : ステッキ < スティック

(9) 英語の原音とかなりかけ離れた発音表記

air エール、fire ハイル、hair ヘール、have ヘヒ、lion ライン、paper ペプル、
river レウル、starts ステルス、supper シュップル、the third デ チルト、
man of war 「軍艦」メン オフ ワル、world ウアルルト

(10) オランダ語の影響を受けているというものの、かなり工夫されている発音表記も多くみられる。

sweet スウィート、web ウエブ、win ウイン、wheel ウイール、well ウエル、
ship-wreck [原文のまま] シップ ウレッキ 「破船」、
tool ト[○]ール、twig ト[○]ウエイキ、two ト[○]ウ、
gratitude グレティテューデ、joy ジョイ、lady レディ、this ティス、
three/tree ティリー、
pupil ピュピル、shirt ショルト、
soap 「サボン」ソープ

W 音を表すのに小さめのウを使っているのはかなり原音に近い表記である。ただし、shipwreck の場合の w 音は英語では発音されないもので、実際の音ではなく文字を参考に発音表記を付けたことがうかがわれる。英語では t 音が語頭に来ると気音を伴って強く発音されるが、その強さを半濁音を表す右肩に着ける○を使って表しているのは秀逸である。拗音や促音を小さい文字を使って巧みに表現しているのも大変工夫されている発音表記法であり、現在でも使われている片仮名表記が多い。Three/tree を「ティリー」と表記したのは興味深い例である。オランダ語では前述したように [θ] 音がないので通常 t 音を用いるが、そうになると three と tree は同じような発音になる。そのため、双方とも「ティリー」と表記したのであ

ろう。Soapを「サボン」と訳しているのは、時代と長崎という場所柄を感じさせる例である。「サボン」おそらくシャボンから来たものなのだろうが、シャボンはポルトガル語である。

会話集

i wish you a good day.
アイ ウィス ユー エ グート デイ
i very humbly Thank you.
アイ ウェリ フコムブリ チエンキ ユー
have you been long here?
ヘヒ ユー ビーン ロンク ヘール
about an hour.
アボウト エン ラウル
go and learn Dutch.
ゴ エント レルン デュッツ

5. 3. 『諸厄利亜語林大成』

1814年に本木庄左衛門、馬場貞暦、末永祥守、榎林高美、吉雄永保たちによって編集された日本初の英和辞典である。1811年に完成した『諸厄利亜興学小筈』は収録語が2,339語であり、テーマ別に見出し語が区分され、その配列もアルファベット順ではなかったのに比べて、『諸厄利亜語林大成』の収録語は5,910語であり、見出し語の配列もアルファベット順になっており、日本初の英和辞典と言ってもよい体裁を備えている。その「凡例」も『諸厄利亜興学小筈』のように編集のいきさつや苦労話ではなく、文法論あるいは品詞論が展開されており、現在読み直してもうなずける内容が多い。以下に引用するのは「凡例」の冒頭部分であるが、生成文法における普遍文法の考え方にも通ずる部分である。

凡そ物にコトに其称呼の異なるは、国に随い境に由て皆各同じからず。特り其詞品に至りては乃ち自然の妙用に出て、大凡万国咸同じからざるコトを得ず。仮令其間一二の小異あることもあるも亦大率精疎の間にありて、究竟は其原一つなり。

品詞論に関する記述は12ページに及び、15ページある「凡例」の大半を占めている。英語の品詞を静詞、代名詞、動詞、動静詞、形動詞、連続詞、所在詞、嘆息詞、の8品詞に分け、動詞としての見出し語にはtoを付けて記述している。井田好治(1982)はこれらの8品詞を以下のように現代英文法の品詞を当てはめている：静詞(名詞と形容詞)、代名詞、動詞、動静詞(現

在分詞、動名詞)、形動詞(副詞)、連続詞、所在詞(前置詞)、嘆息詞。この品詞の分類について、井田好治(1982b, pp.77-78)は以下のような私見を述べている。

これは中世以来のラテン文法の品詞分類法と同一で『大成』の順にラテン語をあてれば nomen, pronomen, verbum, adverbium, participium, coniunctio, praepositio, interiectio となる。

これは一六四〇年のベン・ジョンソンの英文典(Ben Jonson: English Grammar)の品詞分類、すなわち

In our English speech, we number the same parts with the Latines.

Noun. Pronoun. Verbe. Participle.

Adverbe. Conjunction. Praeposition. Interjection.

にも一致する。当然のことといえるが、「凡例」の八品詞論は、西洋文法の忠実な反映なのである。

1814年当時すでにラテン文法の品詞分類法が長崎に伝わっていたことをうかがわせる記述である。

発音についてはブロムホフから学んだため、『諳厄利亜興学小笈』と同様にオランダ語からの影響が多い表記になっている。()内は対応するオランダ語の語である。

(1) オランダ語では短母音の u は [ɯ] (ユ) と発音される。

bud ビュット、butter ヒュットル、cup キュップ、cut クット、drum デュリウム、full ヒュル、fur ヒュル、hunger ヒュンゲル、nut ニュット、to pull ト ヒュール、pulse ピュルス、to rub ト リュップ、summer シュムメル、sun シュン、to turn ト テュルン、under ユンドル、us ユス

ただし、このオランダ語のユという発音が幸いした例も見受けられる。

mute ミュート、pure ピュール、student ステュデント、unicorn ユニコルン、uniform ユニホルム

(2) オランダ語では語尾の d は無声化され、[t] と発音される。

card カルト (kaart [ka:rt]), gold ゴールト、good グート (goed [gu:t]), lad ラット、sad セット、wood ウート、world ウヲルルト

上記のカルトという発音から、日本語には以下の3種類を含め4種類の異なった発音が語源を同じくするヨーロッパ言語から入っていることになる。

カルタ(ポルトガル語の carta)、カルテ(ドイツ語の Karte)、カード(英語の card)

- (3) オランダ語では n の前の k が発音される。
knee キニー (knie)、To knit ト キニット、knot コノット (knoop)
しかしながら、k を発音しない正しい発音表記も数多くみられ、発音表記の不統一を感じさせる例である。
knife 子 (ネ) イフ (mes)、To knock ト ノック、
To know ト ノウ、knowledge ノレッチュ
- (4) オランダ語では v を [f] と発音する。
arrived アルレイフ、even エヘン、evening エーヘニング、five ハイフ、
over オフル、to be vacant ト ビ ハカント、vain ヘイン、
to value ト ヘリュ、to view ト ウィーウ、village ヒレージ、voice ホイス、
silver シルフル
- (5) オランダ語では j を [y] と発音する
January ヤニューエリ、jaundice ヨンジー (「黄疸」)
- (6) オランダ語は ee が [eː] (エー) という長母音を表す
beer 「麦酒」ベール (bier [bi:r] 「ビール」、beer 「熊」)、deer 「鹿」 デール (hert)、
sleeve スレーフ
- (7) r 音の強調
chamber チャンブル、corn コルン、daughter ダウトル、dollar ドラル、flower フロウル、
for ホル、gender ゲンドル、her ヘル、herb ヘルブ、nor ノル、power ポウル、sir シル、
storm ストルム、war ワル、water ウェトル
- (8) 黙示の b を発音する
bomb ボンプ、debt デプト、womb ウラムブ、
- (9) 語尾の k 音
flake フレッキ、neck ネッキ
- (10) 英語の原音とかけ離れた発音表記
air エール、to bow ト ホウ、box ボス、care ケル、church チュルツ、
ear エール、far ヘル、fir ヘイル、fire ハイイル、hair ヘール、here ヘール、
to hire ト ヘイル、near 子ール、rare レール

(11) その他

to educate ト エデュケート、pension ペンション、three /tree ティリー、
she スシー、

that ダット、this ディス

watch ワッチ、to watch ト ウェッチュ watching ワッチン、within ウィジン (『小笠』)
ウィディン (『大成』)

最初の4例はかなり工夫された発音表記であり、特に最初の2例は現在も使われている事例である。次のthで始まる語彙はどれもd音で代用されているが、これらも片仮名表記を原音に近づけようとする工夫の跡がみられる事例である。Watchの発音表記は、単独での発音、不定詞としてのtoが付いた発音、-ingが付いた発音と微妙な発音の変化を片仮名表記でうまく使い分けている例である。Withinの事例は、『諸厄利亜興学小笠』と比べ『諸厄利亜語林大成』で発音表記に進歩の跡がみられる例である。

6. 森山栄之助と中浜万次郎

森山栄之助と中浜万次郎はともに幕末において西洋諸国からの衝撃を身をもって体験し、国家としての対応に大きな功績を遺した人物である。しかしながら、両者の立場は両極端ともいえる程異なっている。3. 4で述べたように、森山栄之助はグループ1に属する当時のインテリ層であり、一方、中浜万次郎はグループ2に属する漂流民である。この両者を比較することで、幕末という動乱期には立場の大きく異なる人々がそれぞれの立場から日本の西洋に対する対応策に参画していたことが理解できよう。

表2 森山栄之助と中浜万次郎の比較

森山栄之助 (1820-71)	中浜万次郎 (1827-98)
長崎のオランダ通詞の家系	土佐の漁師の息子
オランダ語のエリート教育	正式な教育なし、アメリカで初等教育を受ける
オランダ語から英語を学ぶ	直接英語を学ぶ
英語は第2外国語	英語は第2言語
幕府の正式な英語通詞	非正規通訳
外交官	操船術と英語と捕鯨を教授
辞書の編集 (未完)	会話書の編集、操船書の翻訳
痴呆症	失業

6. 1. 森山栄之助

森山は長崎の通詞の家系に生まれた。当時のオランダ通詞の職は封建制度のもとで世襲制であ

り、森山は父の森山源左衛門に幼少のころから厳しくオランダ語を教えられている。そのような森山が英語の学習を決意したきっかけは、イギリス船の来航であり、英語を話す漂流民の増加である。1845年にイギリスのサマランチ号が測量のために長崎港に来航するのであるが、その時に対応した通詞達は誰一人英語乗組員の英語が理解できなかった。その時の通詞たちの失望の様子と国家的な危機意識の高まりは、吉村昭の『海の祭礼』(p. 209)に詳しいので以下に引用する。

英語を修業したオランダ通詞たちも船におもむいたが、乗組員の言葉はまったくわからず、口にする英語も相手には通じなかった。[中略]

「サマランチ」号は四日後に去ったが、オランダ通詞が一人として英語を活用できなかったことに、奉行所も通詞たちも深刻な衝撃をうけた。アヘン戦争で中国がイギリスの支配下におかれ、イギリスの次の目標は日本だという説も海外からつたえられていて、「サマランチ号」の来航も、それを裏付けるものと考えられた。国防上の危険が予想される時期に英語を理解できる者がいないということは重大問題で、通詞たちは、はげしい無力感にとらわれた。

それから二年後の弘化四年七月、アメリカの捕鯨船「ローレンス号」乗組員七名が長崎についたが、むろんオランダ語通詞はかれらの口にする英語をだれ一人として理解できず、オランダ商館長のレフィソンの通詞にたよる以外なかった。

ちょうどこのような状況の中で、漂流民を装ったアメリカ人のロナルド・マクドナルドが松前から長崎に連行されてくるのである。マクドナルドは父がスコットランド人で、母はアメリカ先住民族のチヌーク族である。幼いころより日本にあこがれを持ち、漂流民を装って蝦夷地の焼尻島に上陸し、その後利尻、松前藩を経て長崎に送還されてきたのである。森山はマクドナルドが単なる漂流民ではないことを見抜き、『諳厄利亜語林大成』やオランダ商館長のレフィソンから覚えた英語の発音が全くと言ってよいほど通じない状況を打開するために、マクドナルドに自分たちに英語を教えて欲しいと要望するのである。このマクドナルドからの英語の学習こそが長崎のオランダ通詞たちが対峙していた西洋からの衝撃に対する通詞としての対応である。マクドナルドから英語を直接学ぶきっかけとなった様子について、吉村昭の『海の祭礼』(p. 218-9)から引用しておく。

森山は、マクドナルドに Head と紙に書くように求めた。マクドナルドは、羽ペンを走らせた。

森山は、それを手にして牢格子の外にみせ、マクドナルドに発音するようにうながした。うなずいたマクドナルドが口をひらいたが、それは森山が信じていた発音とは異なっていた。彼の得ている英会話の知識は、「諳厄利亜語林大成」が基本になっていて、それにオランダ商館長レフィソンから教えられたものが加えられている。「諳厄利亜語林大成」には、Head の

発音がヘートと記されているが、マクドナルドの口からもれた言葉は、ヘッ、としか聞こえない。最初の単語から、発音が自分の信じているものどちがっていることに衝撃をうけた。

[中略] 森山も、マクドナルドの口の動きに視線をすえて声を発し、ヘッ、のつぎにdの発音をのみこむようにすることに気づいた。

通詞たちは、紙に発音を片仮名で書きとめていた。

ついで、森山は自分の髪をつまみ、

「ワット？なに？」

とたずねた。

マクドナルドは紙にHairと書き、森山は、それを通詞たちにかざしてみせたが、マクドナルドの口からもれた発音に、ふたたび顔色を変えた。からが信じていた発音はヘールであるのに、マクドナルドの口からは、ヘアーという言葉がもれている。かれは、自分の体が地の底に沈んでゆくような絶望感にとらわれた。

この衝撃と絶望感こそがそれ以後の森山たちの英語学習の動機づけとなるのである。この場面をマクドナルドの視点から見たのが、後日マクドナルドが書いた『日本回想記』(p. 147)にある記述である。

事実、私が監禁されている期間中、ほとんど毎日といってよいほど、森山や他の人びとが私のところに教わりにきた。

マクドナルドからの英語学習は必ずしも順調であったわけではないことが以下の『日本回想記』(p. 148-9)からの記述でもわかる。

私に英語を音読してみせることが、生徒たちの習慣で、一回に一人ずつ音読した。私の仕事は彼らの発音を直すこと、そしてできるだけ日本語で、意味や構文などを説明することだった。われわれのある種の発音、とくに子音を彼らに聞きとらせるのはむずかしかったし、ある種の組み合わせの発音は、とくに発音しにくいようだった。

たとえば、彼らはlの文字を発音できない。できたとしてもきわめて不完全だ。彼らはlをrと発音する。そこで彼らは私の名前のなかのlをrの強い喉音で読んでラナrd・マクドナrdにしてしまった。彼らはまた、子音のあとの末尾に、i(短音のイ)あるいはo(オ)を加える習慣があった。母音に関しては、なんの困難もなかった。母音はすべて、豊かな朗々と響く音であり、末尾のe(oe)まで完全発音される。

ここでも英語の発音の習得が困難であったことが理解できる。オランダ語にも[l]と[r]の発

音があるので、オランダ通詞たちが [l] の発音ができなかったとは考えにくい、[r] の発音をゲルマン語特有の口蓋垂（のどひこ）を振動させる音で代用した可能性はある。英語の子音が難しいのは英語にはオランダ語にない子音があるからである。その代表が [θ] [ð] の音である。「ある種の組み合わせの発音」とはおそらく子音のクラスターのことを指すのであろう。音韻構造が CVCV の日本語母語話者にとって英語の音韻構造の CVC から発生する子音の連鎖は難しかったに違いない。末尾の母音まで完全に発音するというのは、語尾の子音の後に母音を添えてしまうことを指しているであろう。

彼らは文法などの面でかなり上達した。とくに森山がそうだった。ということは、彼らがすすんでそれを私から学びとったということだ。彼らは大変のみこみが早く、感受性が鋭敏であった。彼らに教えるのは楽しみだった。(p. 149)

彼らは驚くほど英語が上達した。その理由は、彼らがこの課業にまじめに取り組んだこと、また彼らのもの分けりのよさや学識の広さは、なみなみならぬものがあり、あるものなどは驚異的であったこと、にある。(p. 166)

マクドナルド『日本回想記』より

オランダ語に精通している者が新たに英語を学ぶことはそれほど難しいことであるとは思えない。英語とオランダ語とは同じゲルマン語系の言語で、非常に言語距離が近い。語源が同じで類似した形の単語が多いうえに、オランダ語のように名詞の性別がなく、動詞の人称、数、時制による変化もかなり簡略化されている。分離動詞と非分離動詞の用法の区別もない。マクドナルドが森山たちが英語の文法面でかなり進歩したと言うのも無理はない。オランダ語通詞は当時の知識階級であり外国語の習得にも慣れているので、新しい言語に対する感受性、学識の広さは当然と言えば当然である。森山たちはこのようにしてマクドナルドからアメリカ英語を習得し、次々と『諳厄利亜語林大成』の 5,910 語の発音表記を書き換えてゆくのである。

森山たちは『諳厄利亜語林大成』に代わる英和辞書として『エゲレス語辞書和解』の編集に取りかかるのであるが、この辞書は未完に終わっている。それに代わるものとして、古賀謹一郎が堀辰之助、西周、千村五郎、竹原勇四郎、箕作麟祥らに命じて編集させた『英和对訳袖珍辞書』がある。この辞書は、953 ページからなる日本初の本格的な英和辞典で、H. Picard が編集した『A New Dictionary of the English and Dutch Languages』のオランダ語部分を日本語に置き換え、熟語なども多数採用して編集したもので、1862 年に出版されている。

6. 2. 中浜万次郎

森山栄之助と対照的な立場から西洋の衝撃に対応した人物が中浜万次郎である。中浜は地球を 7 周する程の距離を捕鯨船で航海しており、彼の半生はまさに波乱万丈と言ってもよいスケール

の大きなものである。以下に略歴を記しておく。

年表 5

- 1827年 土佐の中浜に生まれる
- 1841年 漁に出て遭難、鳥島に漂着、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウラント号に救助され、ホイットフィールド船長とともに、太平洋で捕鯨に携わる
- 1843年 フェアヘブンのオックスフォード学校で読み書きを習う
- 1844年 バーレット・アカデミーで英語・数学・測量・航海術・造船技術などを学び、その後、大西洋、インド洋、太平洋で捕鯨に従事、途中で仙台沖にて日本の漁師と接触
- 1850年 カルフォルニアの金山で金鉱堀、日本に向けハワイを出航
- 1851年 琉球に到着、薩摩に送られ島津斉彬から直接質問を受け、造船などを指導、その後長崎に送られ、取り調べられる
- 1852年 土佐に帰国、河田小龍が万次郎の話を基に『漂異紀畧』執筆
- 1853年 ペリー来航により、旗本直参に取り立てられる
- 1857年 幕府軍艦教授所の教授に就任
- 1859年 『英米対話捷徑』完成、咸臨丸の教授方通弁主務として渡米
- 1864年 薩摩開成所教授となる
- 1869年 開成学校教授となる

中浜の英語は耳から覚えたものであり、発音表記が原音のアメリカ英語に近く、アメリカ口語英語の特徴をよく表している。捕鯨船での勤務が長かったために船乗りの語彙が豊富で生き生きとしているという特徴がある。その反面、一語に複数の発音表記があるなど、文法性の欠如が感じられる面もある。以下で、『亞墨利加詞』と『英米対話捷徑』の発音表記を中心に触れておく。

6. 2. 1. 『亞墨利加詞』

中浜は1853年ごろに『亞墨利加詞』を著している。以下に『資料英学史1 上英学ことはじめ』に収録されている『亞墨利加詞』を基に、中浜の英語の特徴を分析しておく。

(1) 語尾の [t] と [d] の消失

夜 ナイ、桶 バケ、網 ネ、門 ゲイ、風 ウイン、金 ゴマル、島 アイラン、赤 レエ、山 ラアン、地 グラヤン

アメリカ英語では語尾の t, d はかなり弱く発音されるため、ほとんど聞き取れないことが多い。いわゆる「飲み込んでしまう」という発音の仕方をするのであるが、中浜の英語は文字ではなく発音から覚えたことを想像させる発音表記である。山の発音表記に land の「ラアン」を当てているのはいかにも船乗りの英語である。船乗りが海上から陸地を認識するのは、

山を見たときであり、その時叫ぶ英語が“Land!”である。中浜の頭の中では「山」が「陸」なのである。

(2) [ɹ] で [d] を代用

善 グリ、木 ウウリ、夜半 メルナイ

(3) [f] を [s] で代用

包丁 ナイス、遠 サア、火 サヤ、妻 ウワエス、喧嘩 サイト、父 サバ、百姓 サアム

(4) 語尾の [k] を「キ」と発音

首 ネッキ、取 テイキ、厚 セツキ、作 メイケ

このようなkは「キ」と発音表記されるのがこの時代では一般的であるが、最後の「作 メイケ」だけは「ケ」と発音表記されている面白い例である。Takeは『英米対話捷徑』では「テケ」と表示されている。

(5) l音や母音の長短表記の工夫

油 ヲヲエヲ、賣 セイロ、帆 セイ、殺 ケエル、長 ロヲン、悪 バエツ、軍 ウワア、縁 ラアブ、犬 ドウギヨ

中浜は母音を強調して表記する傾向が強い。特にlの前の母音や有声子音の前の母音の表記にその傾向が顕著である。最初の例の「油 ヲヲイル」などは二重母音とダークエルの連続をかなり巧みに表現しており、オイルという現代の片仮名表記よりも原音に近い。「賣 セイロ」もそれに準ずる例であるが、同音異字語の sail を「セイ」としているのはいかなものであろう。中浜の発音表記には、同じ発音にこのように複数の片仮名表記を当てるものが多い。「悪 バエツ」「犬 ドウギヨ」の発音表記も、有声子音の d、g の前の母音はかなり長めに発音されるのであるが、その長さを忠実に表そうとしていること感じさせる発音表記である。

(6) その他

空 アップ、水 ワタ、夏 シヤマ、秋 ヲトム、紙 ペバ、舌 タン、孫 グランチルレン、空腹 ハンギレ、髪 ハヤ、天 ヘブン、日 シャン、酒 ランム、詞 ラングイチ、琴 ピアネ
日本 チャッパン、亜墨利加 メリケ、唐土 チャイニ、暎吉利 インギラン、天竺 インデア、魯西亜 ルシア、

中浜の英語は即物的で状況依存的であるが、その好例が「空 アップ」である。“Look at the sky.” というのはある種観念的な表現であり、その場で言うのは“Look up.”なのであろう。オランダ通詞たちが編集した辞書はすべてオランダ語の発音の影響を受けているが、それが皆無なのが中浜の英語の特徴である。その好例が「空腹 ハンギレ」「髪 ハヤ」

「日 シャン」である。他の辞書に見られるような「ヒュンゲル」、「ヘール」、「シュン」とは無縁の世界の英語である。中浜の国名の発音表記も巧みである。現在からみてもかなり原音に近い発音表記である。

6. 2. 2. 『英米対話捷徑』

中浜が 1859 年に咸臨丸で渡米するに際し、乗組員のために書いた会話書で、当時ベストセラーとなったものである。

A B C of the letter
 エ ベ セ ヲフ ズイ ラタア
 Q How many letters are there
 コシチャン ハヲ メニ ラタシ アー ザヤ
 A There are twenty-six in English
 アンシャ ザヤ アー ツーエンテ セキス イン エンゲレス

定冠詞の the はオランダ通詞が編集した辞書はすべて「デ」という発音表記であるが中浜はここでは「ズイ」と表記している。Question を Q と、Answer を A と表現するのもいかに口語的である。その発音も「コシチャン」と「アンシャ」であるが、『諳厄利亜語林大成』では「クウェスシン」、「エンセル」と表記されている。Letter や there も中浜は「ラタア」「ザア」であるが、『諳厄利亜語林大成』では「レットル」、「デール」である。耳（音）から入った『英米対話捷徑』と目（文字）から入った『諳厄利亜語林大成』の違いがよくわかる例である。

They are A B C D E F G H I J
 ゼイ アー エー ビー シー リー イー エフ デー エイチ アイ ゼイ
 K L M N O P Q R S T U V
 ケー エル エム エン ノー ピー キウ アー エシ チー ユー ヴヘー
 W X Y Z
 ダブリヨ エキシ ワイ ジー

アルファベットの発音表記で特筆すべきは D、O、R、Z の読み方である。アメリカ英語では、母音と母音に挟まれた t と d は neutralize されて [ɹ] のように発音されることが口語では多いが、中浜の「D リー」はそれをよく表現している。O の「ノー」という表記は、O が直前の N と同化した結果であるが、これは連続して発音することで起こる現象である。このようなことから、中浜はアルファベットの 26 文字を個々の文字の集合体としてよりは、音の連続体として記憶していたことが強く推測される。R の音も、Z の音もともにアメリカ英語の発音である。これらの音を『諳厄利亜興学小筈』と『諳厄利亜語林大成』は、ともに

「アル」「イチセット」と表記している。

会話文

How do you do Sir?

ハヲ ツー ユー ツー シャアー

I wish you better.

アイ ウイシ ユー ベタ

I had no sleep last night.

アイ ハーデ ノー スリープ ラースト ナイ

Sirを『諸厄利亜語林大成』は「シル」、betterを「ベツテル」と表記しているが、「シャアー」「ベタ」のほうが原音に近い。母音を強調してhadを「ハード」と表記するのは『英米対話捷径』の特徴である。音声学的に言えばnightを「ナイ」と表記するのであれば、sleepもlastも「スリー」「ラース」と表記するべきであろう。

Can you say your lesson without book?

キャン ユー セイ ユーア レシン ウエサアヲト ボック

You are certainly very knowing.

ユーアー シャテンレ ウエレ ノーイン

最初の文では不定冠詞のaが抜けている。2番目の文は文法的にはYou certainly know very well.となるべきであるかもしれない。

speak スパーカ、スペーケ、speaking スヘキン

the スイ、ズイ、ツイ (全て子音の前)

of the moon take the air in the air

ヲフ スイ ムーン テキ スイ アヤ インズイ アヤ

It is イート イジ、It is イート イ

hard ハーリ ハアリ

but バッタ、ハツ

wind ウインド、ウイント

have ハーブ ハーフ、

I have not seen him.

アイ ハーノ ノッタ シー ヒム

『英米対話捷径』の特徴の一つに発音表記の不統一があるが、上記の例はいずれも同じ語に複数の発音表記を用いている例である。中浜は単語とその発音を1対1の関係で記憶しているのではなく、フレーズ単位で記憶しているのではないかと思わせる事例である。

hot ハータ、has ハース

母音を強調して表記している例である。原音に近い表記であれば「ハッ」「ハス」と表記すべきであろう。

以下に『諸厄利亜興学小筈』、『諸厄利亜語林大成』、『英米対話捷徑』の特徴的な単語を比較しておく。() 内の表記は、『亞墨利加詞』のものである。

表 3

	小筈	大成	捷徑
bird	ビルト	ビルト	(ボヘル)
church	チュルツ	チェルツ	チョチ
daughter	ドートル	ダウルト	ダーク
fair	ヘール	ヘール	フハヤ
father	ハードル	ハードル	フワサ (サバ)
five	ハイフ	ハイフ	フハイ
four	フール	フール	フヲワ
good	グート	グート	グーリ
hair	ヘール	ヘール	(ハヤ)
head	ヘート	ヘート	ヘデ
hot	ホット	ホット	ハータ
hundred	ヒュンドルト	ヒュンドルト	ハンヅレ
mother	モードル	モードル	モーザ (マザ)
sun	シュン	シュン	シャン
that	ダット	ダット	ザヤタ
water	ウワトル	ワ(ウア)ートル	(ワタ)
east	イースト	イースト	イースト (イイシツ)
west	エスト	エスト	ウエスト (ウエシツ)
north	ノルス	ノルス	ノース (キウス)
south	ソウス	ソウス	ソース (シアウス)
land	レント 国	ラント 国 (cf. ランデ ラン 山)	(ラアン 山) 遠藤高璟『時規物語』
America	エメリケ	エメリケ	(メリケ)
English	エニギリス	エンギリス	エンギリス
England	エンキレント	エンキレント	(インギラン)
Japan	ゼヤッペン	ゼヤッペン	(ジャッパン)

7. 時代の潮流の中での主人公たち自身の対応 — まとめ

幕末期は日本という国家が大きく変わる時代であったが、同じようにその当時の主人公たちも変革を余儀なくされた。以下は『福翁自伝』からの抜粋であるが、福沢がどのようにして時代に適応していったのかを如実に表す劇的な一節である。現実には直面し、そこから衝撃を受け、どう対応すべきか思案した末に方向転換を決心し、そのための方法論を鮮やかに表現している部分である。方法論においても、まずは当時英語の第一人者の森山に入門を申込み、次に幕府の機関である蕃書調所を訪ね、最後は自律的な道を歩む決心をするに至っており、福沢の心理の経過を見事に表している。[] 内の語句は筆者による添加である。

[現実] 其処へ行って見たところが、一寸とも言葉が通じない。此方の言うこともわからなければ、彼方の言うことも勿論わからない。店の看板も読めなければ、ビンの貼紙もわからぬ。何を見ても私の知っている文字というものはない。

[衝撃] 横浜から帰って、……実に落胆してしまった。……今まで数年の間、死物狂いになってオランダの書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、……さりとは誠に詰らぬことをしたわいと、実に落胆してしまった。

[対応] けれども決して落胆していただける場合ではない。……今我が国は条約を結んで開けかかっている、さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない。この後は英語を読むより外に仕方がないと、……また新たに志を発して、それから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、

[方法論：オランダ語⇒英語] さてその英語を学ぶということについて如何して宜いか取付端がない。…… [森山多吉郎] ……その前に私が横浜に行った時に、キニッフルの店で薄い蘭英会話書を二冊買って来た。ソレを独りで読むとしたところで、字書がない。英蘭対訳の字書があれば先生なしで自分一人で解すことが出来るから、どうか字書が欲しいものだ…… [蕃書調所] ……ところで、だんだん横浜に行く商人がある。何か英蘭対訳の字書はないかと頼んでおいたところが、ホルトロップという英蘭対訳発音付の辞書一部二冊物がある。…… [自立] サアもうこれで宜しい、この字引きさえあればもう先生は要らないと、自力研究の念を固くして、ただその字引きと首つ引きで、毎日毎夜独り勉強。またあるいは英文の書を蘭語に翻訳してみて、英語に慣れることばかり心掛けていました。

その一方で、時代の流れに適応できなかった者たちも多い。森山は幕府の瓦解とともに抜け殻のようになり、最後は痴ほう症のような症状を呈して死んでいる。中浜も浜田彦蔵も幕末の一時に光り輝いた存在であったが、明治政府の発足とともにその輝きを失っている。そのような状況を吉村昭は『アメリカ彦蔵』(p. 542) の中で見事に表現している。以下に本論のまとめに代え

て引用しておく。

かれは、年を追うごとに身分の存在価値が日本の社会の中で次第に薄れてゆくのを感じていた。明治維新以来、英語教育は急速に充実し、英米人と見まがうほど流暢な英会話をこなし、読み書きにも長じた者が増していた。

時代は幕末から明治へと変わったのである。

参考文献

- Clyde, Paul H. and Beers, Burton F. (1975). *The Far East: A History of Western Impacts and Eastern Responses, 1830-1975*. Prentice-Hall.
- 福沢諭吉 (1978) 『福翁自伝』 富田正文 (校訂) (岩波文庫) 岩波書店
- 井田好治 (1982a) 「長崎本『諸厄利亜興学小笈』の考察」 日本英学史料刊行会 (編) 『長崎原本『諸厄利亜興学小笈』研究と解説』 大修館書店 pp.7-38
- 井田好治 (1982b) 「長崎本『諸厄利亜語林大成』の考察」 日本英学史料刊行会 (編) 『長崎原本『諸厄利亜興学小笈』研究と解説』 大修館書店 pp.39-80
- 井上靖 (1974) 『おろしや国酔夢譚』 (文春文庫) 文藝春秋
- 泉川渉 (2009) 『津太夫たちの長い夢』 文芸社
- 加藤九祚 (1993) 『初めて世界一周した日本人』 (新潮選書) 新潮社
- 桂川甫周 (1990) 『北槎聞畧—大黒屋光太夫ロシア漂流記』 亀井高孝 (校訂) (岩波文庫) 岩波書店
- 川澄哲夫 (編) (1988) 『資料日本英学史 1 上 英学ことはじめ』 大修館書店
- 川澄哲夫 (編) (1998) 『資料日本英学史 1 下 文明開化と英学』 大修館書店
- 木崎良平 (1991) 『漂流民とロシア』 (中公新書) 中央公論社
- W. ルイス、村上直次郎 (編) (1979) 『マクドナルド「日本回想記」』 (刀水歴史全書 5) 刀水書房
- 松坂ヒロシ (1986) 『英語音声学入門』 研究社出版
- 永国淳哉 (編) (2010) 『ジョン万次郎 幕末日本を通訳した男』 新人物往来社
- 中濱万次郎 (安政己未) 『英米対話捷徑』 知彼堂
- 日本英学史料刊行会編 (1982) 『諸厄利亜興学小笈』 十卷三冊 大修館書店
- 日本英学史料刊行会編 (1982) 『諸厄利亜語林大成』 十五卷四冊 大修館書店
- 日本英学史料刊行会編 (1982) 『長崎原本『諸厄利亜興学小笈』研究と解説』 大修館書店
- レザーノフ (2000) 『日本滞在日記—1804-1805』 大島幹雄 (訳) (岩波文庫) 岩波書店
- 佐藤昌介 (1997) 『高野長英』 (岩波新書) 岩波書店
- 司馬遼太郎 (1987) 『菜の花の沖』 1 巻～6 巻 (文春文庫) 文藝春秋
- 司馬遼太郎 (1989) 『ロシアについて 北方の原形』 (文春文庫) 文藝春秋
- Sterkenburg、他 (編) (1994) 『オランダ語辞典』 講談社
- 津田文平 (2010) 『漂民次郎吉—太平洋を越えた北前船の男たち』 福村出版

山下恒夫（2004）『大黒屋光太夫』（岩波新書） 岩波書店
吉村昭（1980）『漂流』（新潮文庫） 新潮社
吉村昭（1989）『長英逃亡』上・下巻（新潮文庫） 新潮社
吉村昭（2001）『アメリカ彦蔵』（新潮文庫） 新潮社
吉村昭（2003）『漂流記の魅力』（新潮新書） 新潮社
吉村昭（2004）『海の祭礼』（文春文庫） 文藝春秋
吉村昭（2005）『大黒屋光太夫』上・下巻（新潮文庫） 新潮社
<http://jp.wikipedia.org/wiki>
<http://en.wikipedia.org/wiki>

注）本稿は、2011年10月30日に開催された国際行動学会第8回年次大会・立教大学英語教育研究所合同イベントとして行った公開講演会「日本人と英語 — 黒船と漂流民の物語に見る異文化との遭遇」の講演内容を加筆し、論文としてまとめたものである。